

明治・大正・昭和の初期に仏教を中心として取り組まれた 社会福祉事業に関する歴史的研究（上）

—— 共生理念との関連で ——

瀬川久志・三宅章介

はじめに

本研究は、権尾弁匡の共生理論の核心を「生きる」「国際共生」「国体護持」「自然環境」「神谷正義、巻末参考文献二」と捉え、なお再検証すべき観点を「地域との共生」と仮定し、大正初期の岡山県・美作仏教各宗自修会の取り組みの実践の内在的分析・検証を踏まえ、昭和初期に及ぶ仏教家を中心とする福祉社会事業の社会的意義に言及したものである。そのための基礎的資料を得ることを目的とし、文献・資料によって得られたガイドランスをもとに、著者らは、平成二七年度に、中国地方を中心に、数回にわたる現地調査を実施した。この調査は、現地踏査、資料収集・聞き取り調査等を中心とするもので、この小論において、その調査結果を、研究ノートとして取りまとめたものである。

新自由主義の波が台頭する中、国際テロリズムの恐怖が世界を席卷、成長なき「失われた二〇年」を境に金権主義が横行し、企業・社会の格差構造が進む中、「福祉国家」は変容し危機に立たされている。また、仏教寺院の存立を危ぶむ声が各方面から聞こえる。こうした問題状況の中で、本研究は、その延長線上に仏教「福祉」が目指すべき新たな課題

の抽出にも視点を当てている。そのためには、広く現代仏教教団・末寺が行うさまざまな地域的な取り組みにも焦点を当てなければならないとの考えから、事前に収集した文献・資料の検討から得られる裏づけを以って、以下の調査を行った。本研究は、あくまでも研究の方向性を模索したもので、調査レポートの域を出るものではないこと、また内容が多岐にわたるため上・下の構成とし、参考文献等は下に回すこととしたことをお断りしておきたい。

人と人のきずなを切り裂く過疎化

最初に取り上げるのは、益田市にUターンした寺院のケースである。「過疎発祥の地」と呼ばれ、ここで、浄土真宗のアイ（I）ターン事業で住職になった善正寺の若い住職を訪問した。過疎地の現状と、そこに位置する寺院の果たすべき役割について素描を行うために、「読売オンライン」から当時の状況を振り返ってみる。

国内最西端の豪雪地帯・益田市匹見町は過疎発祥の地と呼ばれる。人口減少に拍車をかけたのが、一九六三（昭和三八）年の通称「三八豪雪」^{さんぱんごうせつ}。六三年の前年の暮れから降り始めた雪は、二月まで断続的に降り続き、ピーク時には、多いところで、四・四メートルの積雪を記録した。各地で道路が寸断されて、路線バスは止まり、電話も通じず、町は孤立状態に陥った。雪崩による死者は五人、損壊家屋も三〇〇戸以上上った。

若者たちは厳しい自然環境を嫌って、地元を離れ、職を求めて都市部へ出ていき、過疎化が文字通り雪崩のごとく進行した。人口は一〇年間で半減し、過疎対策に奮闘する町長は「過疎町長」の異名をとった。山間部への財政支援を求めた結果、法案成立への機運は高まり、七〇年に「過疎法」が制定された。町は同法に基づいて過疎債で道路や住宅を整備し、次年度以降も同様の公共事業を続けた。しかし、道路や住宅が完成しても雇用を創出できず、人口流出に歯止めをかけることはできなかった。

高度成長は過疎を社会法則とした。過疎化の波は中国山地一帯を襲い、中国新聞社がその実態を調査し、『中国山地(上・下)』(参考文献四三)に纏めたのが、一九六七(昭和四二)年であった。コンビニの数よりも多いとされる現代仏教寺院の多くが、この過疎地帯に存在している。匹見町は、二〇〇四年には益田市と合併。現在、高齢化率は五割を超え、総戸数二〇戸未満の限界集落が過半数を占める。町長は「過疎は人のつながりをバラバラにする。住民同士が助け合い、いたわり合うことが、何より大切だ」と述べた。共生がしきりに叫ばれるが、このように人と人をバラバラにしている現状を、我われも含めて仏教者はどのように考え、何をなすべきなのか、筆者らは本研究を通じて考察していきたい。

<http://www.yonituri.co.jp/local/shimane/feature/CO006016/20140225-OYT8T01334.html> (二〇一五年一二月二六日 アクセス)

仏教寺院と地域振興

いま、地方財政危機、限界集落という名の下に過疎地の切捨てが進行する中、過疎地にあつて無住寺化しているかつての寺院の崩壊が進んでいる。人口が減少し学校はなくなり、病院も消え、自治体すら統廃合、集落は老人ばかりの廃墟となり、地域全体の崩壊が進んでいる。そんな中、仏教各宗の本・末寺は何をすればよいのか。このテーマの一端に迫るために鳥根県を訪れた。

鳥根県益田市、浄土宗本願寺派善正寺を訪問した。寺の正面の空き地では、老人がゲートボールをしている。それ以外に人影はない。梅雨が明け、蟬が一齐に夏の合徒がっしよを唱えている。調査結果は後に記す。益田市では、匹見町外から移住し、農林業の研修を受け、新たに就業しようとする人に、「益田市匹見地域農林業担い手確保育成事業補助金」(毎月

上限一〇万円、最大一年間）を交付し、就業と定住を支援している。また空き家や公営住宅も紹介しており、どこでもやっていることなのだが、空き家の有効活用と、ＵＩターン希望者の定住促進を図るため、「空き家バンク制度」を創設している。

しかし、定住を促進し、少しでも過疎化を逆転するほどの効果は持っていない。ここで、本研究が仏教福祉の源流を考察することを狙いとしているにもかかわらず、話が脇道にそれいていると思うかもしれない。しかしながら、福祉とは広義の「心豊かに健康で文化的に暮らせること」と考えるならば、仏教福祉が、地域での生活の安定や豊かさにも心配りをしなければならぬことは当然のことといえよう。仏教福祉は地域の福祉にも貢献しなければならない。以下、この観点からしばらく考察していきたい。

浄土真宗では、ＩＵターン希望者に補助金を出し、定住を支援する制度があるが、これは同宗のホームページに紹介がある。「寺院振興支援対策（過疎対策）」として、宗門の過疎対策など、さまざまな支援事業を行っている。ホームページでは、「宗門における過疎対策の推進は、総局が『中央寺院振興対策委員会』並びに『教区寺院振興対策委員会』と緊密な連携を図り、過疎地域に所在する寺院をはじめとする既存寺院が『寺院規程』に定める寺院の目的を果たすことができるよう支援するもの」とされている。

具体的には、ふるさとを離れて過ごす門信徒や、その子や孫への伝道を目的とした『離郷門信徒のつどい』の開催について支援がある。また、『寺院振興金庫』（財的支援）、『寺おこし事業の紹介』（寺院相互扶助）、『寺院振興に向けた相談窓口』等、「宗門の伝道教化基盤でありますそれぞれ寺院の充実振興により、宗門の教線が維持されることを願っております」とされている。参照したサイトは以下の通り。

<http://www.hongwanji.or.jp/project/activity/k000751.html>

<http://www.hongwanji.or.jp/project/kasoo1.html>

<http://www.city.masuda.lg.jp/soshiki/58/detail-2582.html> (以上すべて二〇一五年十二月二十八日 アクセス) またサイト内の次の資料を参照した。「寺おこし事業の紹介」実施要項 「寺院振興支援対策(過疎対策)」の基本方針(目的、対象、方法) 平成二六年度「寺院振興支援対策推進計画」について 平成二六年度「教区寺院振興支援対策(過疎対策) 推進計画書」一覽(要約) 平成二六年度「教区寺院振興支援対策(過疎対策) 推進計画」について

浄土宗においても、のちに述べるように、同趣旨の制度を持っており、仏教各宗は自治体と財政による再配分機能が弱化している現状から、広く地域と連携して取り組みを充実発展すべきである。

山本空外上人(点と線そして面へ)

浄土宗恵日山良忠寺。浜田市を中央部で南北に流れる三隅川の左岸に寺院がある。寺院が経営する児童養護施設は目と鼻の先の右岸にある。電話で話すと、「本堂を開けて待っているから」というので、本堂のお祖師さんに手を合わせてから歓談をした。七月二十七日は、後に紹介する開山者(良忠上人)の命日で、祭壇の準備をしているとのことであった。児童養護施設の児童たちは、休日とあつて施設の中で元気に遊んでいたのが印象的であった。

住職は尼さんで、津山市の児童養護施設・立正青葉学園の園長・岸本延子によれば、だいぶ前にあとを継ぐために得度をして頭を丸めたそうだ。東海学園大学の説明をすると「名古屋の児童養護施設と交流がある」とのことだった。「椎尾辨匡の開設したところか」と聞くと、そうだ。意外なこともあるものだ。このようなことは実際に足を運ばないとわからないことで、特記しておきたい。

このように、仏教社会事業の個別的取り組み(点)をつなぎ合わせ(点と点を線で結び線となし)、面にまで理解を広

げるのが、今回の研究の目的・方向性となる。こうした視点は、これまでの社会事業の研究に欠けていた視点ではないだろうか。本研究の趣旨は追って深めていきたいと考えているが、ここでは問題意識の開示にとどめておく。

ちなみに、現在の代表は三上良匡師で「匡」の字がついている。同師は東京帝国大学文学部で学んだ山本空外上人の弟子であり、椎尾辨匡と縁で繋がっているのではないかとの推測が成り立つ。この推測に関して後述するが、空外記念館の機関誌三〇、三一号に三上良匡が寄稿していることから、空外との徒弟関係はほぼ間違いない。良匡師は同じ浜田市で保育園（社会福祉法人三保隣保園三保保育園）も経営している。

では、椎尾辨匡と空外との繋がりはどのようなものだっただろうか。山本空外（一九〇二年九月一三日・二〇〇一年八月七日）のプロフィールを見てみる。彼は、哲学者、浄土宗の僧として傑出した業績を残している。広島市南区金屋町出身で、一九二六年に東京帝国大学文学部哲学科を卒業した。一九二七年には山形高等学校教授、一九二九年広島文理科大学助教となり、二九・三一年に欧米留学し、一九三五年に「哲学体系構成の二途プロローグス解釈試論」で文学博士。三六年広島文理科大学教授、原爆により被爆し、同年望月信亨のもとで出家、四七年広島文理科大学を退官。その後は、一九五二年に愛媛大学文学部教授を務めた後、五三年に法蓮寺住職となっている。広島大学文学部教授も務め、六六年に定年退官し名誉教授となっている。八九年に空外記念館が開設され理事長となった。

このように、空外上人は、東京で学究生活の緒に就いたわけであるが、生まれ故郷である広島を中心に学問・普及活動を続けた人である。写真やビデオで拝見する限りで、その飄々として気負いのない風貌から、かつ自他を区別しない信念の持ち主で、周囲に与えた影響大であったことは、容易に思い致すことができる。筆者らは、空外聖人の足跡を訪ねて、再度この記念館を訪問することになる。

筆者らが作成した「仏教福祉に関する年表」——ここでは紙幅の関係から掲載しない——によれば、椎尾辨匡の東大

卒業が一八九五（明治二八）年であるから、空外は弁篋より二〇年遅れで東大を卒業している。ここでは、同じ東京帝国大学の学徒であったことに注目しておきたい。

空外は、先述したとおり、辨匡（一八七六年七月六日・一九七一年四月七日）よりも二〇年後の人ではあるが、どういふ風に仏教思想を受け継いでいるか、また異動があるのか、その大部の著書によつて考察することは、大きなテーマとなる。また、空外に師事した良匡がどのようにその思想を受け継いだかも、魅力的な研究対象となるだろう。さて、「平成一七年一〇月一〇日 追恩別時念仏会講話要録―空外記念館講演仏身論について 河波定昌」によれば、「空外先生は東大の哲学科を卒業せられて、更に研究を進められていきました。卒業論文はカントを中心とするドイツ近代哲学をテーマとするものでありましたが……この著の巻頭に『この著を弁栄聖者に捧ぐ』とありますように、空外上人と（山崎一筆者）弁栄聖者の間には切り離すことのできない深い因縁があります。……年は東大で、日本で初めて『宗教学』という講座が開設されて丁度百年になりますが、その講座を最初に担当したのが姉崎正治先生でした。そしてその最初の弟子が椎尾弁匡師でした。そして椎尾師はやがて大正大学の宗教学の講座の開設に連なつてゆくのであります」（傍点は筆者）とある。この辺りにどのような接点があつたのだろうか、興味をそそられるところではあるが、椎尾氏と二世代遅れながら宗教学の袂たもとを連ねていた（本稿の趣旨に即していえば点と点が点線でつながっている）ことは容易に想像できる。山崎辨榮師は、大正時代に光明運動を起こした人である。辨の字は椎尾に継承され、空外は山崎辨榮を師と仰いだ。

法然上人学問の故郷・菩提寺と地域振興

ここでは、共生の重要な構成理念と筆者らが考える「地域社会との共生」を軸に、法然上人の学問のふるさと「菩提寺」再興問題を考えてみたい。この取り組みと成果とが、広義の仏教福祉の今後の在り方にとって極めて重要だと筆者らは考えるからである。とはいえ、状況は複雑であり、その前にまず、後掲参考文献二五、袖山榮真『浄土宗報恩明照会 百年の歩み そして次の百年へ』に即して、本稿の研究の趣旨と、ここで考察する菩提寺の整備にかかわりの大きい報恩明照会（現在のともいき財団）の沿革および菩提寺整備の記録を記す。元号表記は引用であるので元のままとした。

明治四四年、法然上人への六番目の大師号「明照大師」の加謚宣下及び「明照」の勅額下賜を記念して、大正三年に設立されたのが報恩明照会であった。筆者らがまとめた「岡山県美作地域・自修会による仏教福祉事業に関する研究」（参考文献一九）に登場する美作地域仏教各宗自修会が、大正天皇即位による恩赦に伴う出獄者に対する支援活動を始めたのもこの時期であった。袖山榮真は、かつて筆者への私信において、この事実を仏教会掲げての社会事業への大きなうねりと評していた。

大正三年九月二六日に法人設立登記が完了し、初代総裁には山下現有浄土宗管長、会長に宇都宮善道執綱が就任した。大正一一年浄土宗務所に社会部が設置され、昭和九年には社会事業に対し、「如何に宗侶の関心を高めるか」という趣旨から『一寺院一事業』運動が進められた。大分県が過疎化の中の地域振興運動として取り組んだ「一村一品」運動の走りといえなくもない。このように、仏教教団が資本主義の発展に伴う諸矛盾ともいえる社会問題に対し、社会政策の展開の先駆的役割を果たしてきたことは、もっと注目されてよい。しかし財源の確立という点では、財団の目標であった基本財産五〇万円に届かず難しい状況にあった。

太平洋戦争後、日本の復興期には、各地で浄土宗の社会事業施設が多大な貢献をし、その後、徐々に事業が民間から官公立へと移行され、財団の活動も休眠状態となっていく。昭和五〇年、浄土宗開宗八〇〇年を迎え、財団の活性化の機運が高まり、浄土宗の公益教化事業団体の活動助成は財団を通じて行うことになった。昭和六〇年には、財団の寄付行為を改正し、「教育教化事業及び社会的慈善事業を推進して、文化と福祉の向上を図ることを目的とし、教育教化事業及び社会的慈善事業に関する調査研究とこれらの事業の奨励助成、並びに生涯教育研修施設の設置運営すること」を事業として掲げた。

こうして、昭和六一年岡山県奈義町にある法然上人初学の地に「那岐山菩提寺研修センター」を建設し、青少年教化並びに生涯学習施設として運営が開始されたが、平成一六年度をもって運営廃止に至った。平成二四年には、新公益法人制度に伴い事業を整理し、地域交流事業、助成事業、相談活動事業、国際協力事業、ラジオ番組制作事業、普及活動事業などの事業を展開することとなった。

平成二五年四月一日からは、先述した公益財団法人浄土宗ともいき財団へ移行し、初代理事長に袖山榮眞、業務執行理事藤木雅雄が就任し、今日に至っている。『浄土宗報恩明照会一〇〇年史』（非売品）を発行した。二〇一四年度に研修施設老朽化のため解体、撤去され、後述するように再整備が行われるのである。（写真は二〇一五年七月二六日 梵鐘脇から本堂へいたる歩道の再整備である。手前が大イチョウへ通ずる）この再整備と利用の現状については（下）で紹介することとする。



石井十次の岡山孤児院



本研究の中心は、太平洋戦争までの仏教福祉の研究ではあるが、非仏教系の社会事業を排除してはいない。社会事業のアクターたちが、中央政府の政策貧困、未成熟の中、自らの信念と思想、スタイルにおいて人的ネットワークを創造、活用しながら、独自性を発揮しつつ取り組んだのが、この期の社会事業を貫く制度設計であったのではないかとの仮定にたつて考察を進める。

アクターたちの取り組みのそれぞれが、恰もカンブリア期の生命進化の大爆発のように、お互いが競い合い、吸収しながら切磋琢磨して社会事業のこの期ならではのモデルを作っていた——そしてその大きなうねりが大正デモクラシーなどの社会潮流とも連動しながら、国家をも動かす波となっていたのではないか——との考えである。

石井十次の社会事業に関する研究は、参考文献の二二、二三、二四、二五などに見られるところであるが、これらの研究を参考にし、社会事業のアクターたちのネットワークにも着目しながら考察を進める。「ともいき」は、人と人とのネットワークそのものであり、点は線、面へと拡大鏡を通じて考察されなければならないと考えるからである。ただ、ここではその考察が「調査レポート」の域を出ていないことをお断りしておきたい。筆者らは、二度目の調査を初秋に企画した。

石井十次の岡山孤児院の残像——四九歳で石井十次が他界したあと、育児院はいったん解散し新天地育児院として今に継承されている——を同地の新天地育児院に見ることができる。院舎の入り口を入り、児童に囲まれた指導員の女性

に要件を告げ、院内を案内してもらった。写真はこのあと紹介する孤児院発祥の地・禪宗の三友寺から移築した住宅である。新天地育児院は、最初この建物で、児童とスタッフが寝泊りしていた。私事ではあるが、筆者の妹が、現在岡山県津山市の児童養護施設・立正青葉学園の園長職を務めており、今もなお職員研修などの形で、交流は続いている。十次たちが築き上げてきた人と人とのネットワークは、今に継承されているのである。点と点は線になり、面を形成して今日に至っている。続編でも記す予定であるが、美作仏教各宗自修会の取り組みの延長線上で、昭和初期に誕生した妙勝寺の養老事業（報恩養老院）は、戦後児童福祉の充実の代償として津山市へ移管され、その跡に立正青葉学園という児童養護施設を誕生させた。養老院はときわ園と名称を変え、現在指定管理事業者の募集となっている。

その生みの親は、これまた私事であるが、私の父の瀬川一行であった。養老事業を立ち上げた私の祖父・瀬川學進は岡山市の近くの妹尾町の出身であり、石井十次らの社会事業の影響を受けていたはずである。瀬川學進は、日蓮宗の僧侶であったが、「慈愛」の精神で養老事業を開始したという。この養老事業は、仏教自修会の同じメンバーである大円寺（天台宗）の施設院とも連携しながら、社会事業発展の一翼を担った。このことに関しては、またふれる機会がある。

話を新天地育児院に戻すと、東山の小高い丘の上にあるこの地からは、岡山市内が眺望できる。園内の植え込みには、石井十次の胸像が建てられている。訪問を事前に伝えていないにもかかわらず、見学に付き合ってくださいったスタッフの方には感謝の念がこみ上げてくる。スタッフにお暇を請い、孤児院開設の地、三友寺に向かった。文献に書かれてい



るとおり、十次が三人の孤児を連れて来たのだが、実はこのときは、この禪宗の寺院は無住寺だったそうで、偶々車で外出先から戻ってきて筆者らに説明してくれた奥さんと住職が、今、寺院の経営に当たっているとのことであった。

十次は、故郷の宮崎を離れ、医学を志して岡山の地を訪れ、キリスト教の影響を受けたこともあり、アメリカから同志社大学経由で岡山へ布教に訪れたアダムス女史とも連携して孤児院の運営に当たった。その敬虔なキリスト教信者の十次だが、仏教寺院とも懇意にして孤児救済事業を開始したことは、十次の心の広さを伺える材料として共生研究の肝に銘じておきたい。美作仏教自修会の活動もそうであるが、偏狭なセクト主義とは無関係であった。事を構え積極果敢に実行に移すときの大同団結、これこそ当時の社会事業の核心ではなかったか。

最初の孤児院が、臨済宗のこの寺院になぜ出来たのか、そのいきさつは今のところ分からない。石井十次は、この時すでにキリスト教（プロテスタント）の信奉者で、廃仏毀釈の中、キリスト教と居場所を失う危機に直面した仏教との緩やかな連合が形成されていたのではないか。そのことは、山室軍平や、留岡幸助など他のキリスト教信奉者が同じ社会事業に乗り出したことを考えれば容易に理解できる。

太平洋戦争末期の岡山大空襲によってすべてが消失したが、写真は現在の山門と庫裏で、庫裏の向こうの方角一帯に、孤児院の建物が展開していた。十次は、自らの病状悪化、経営難、それにエミールの自然主義教育の実践のために、孤児院を宮崎県茶臼原高原へ段階的に全面移転するのであるが、このことに関しては続編で述べる予定である。そこには、大正デモクラシーのうねりとの関係が見え隠れすることを、あらかじめ紹介しておきたい。この仏教者とキリスト教者との、いわば棲み分けを前提とした緩やかな連携に関しては、アダムス女史が設立した岡山博愛会病院を訪れたときに気づいたものだが、許された紙幅を超えてしまったので稿を改めて述べることにする。

命を賭して闘ったアダムス女史

三友寺の西隣には、アダムス女史ゆかり縁の岡山博愛会病院があり、その正面入り口横に、十次の胸像が立っている。岡山博愛会病院は、アメリカン・ポールド宣教師で、岡山県社会事業の四聖人（留岡幸助、山室軍平、石井十次、A・P・アダムス）の一人に上げられるアリス・ペティ・アダムス女史によって設立された病院である。

同女史については文献・資料によってあまり情報が得られないが、山陽新聞社の『岡山孤児院物語』（参考文献二二）に、その人となりや活動歴が散見される。孤児院の子どもたちの面倒を見、乳がンをわずらい、痛みを堪えて故郷のアメリカに帰国した様子が記されている。布教と医療、社会事業に、まさに命をかけて闘った人だった。現代の寺院は、これらの人たちから何を学べばいいのだろうか。

点と線

私たちの調査・研究は、こうして、線と線をつなぎ、線の上を網渡りで進んで行く。この点と点をつなぐ作業で重要なポイントとなるのが、次に訪問した社会福祉法人旭川荘を創設した川崎祐宣すけのぶだ。このことをこれから証明していくが、そのために後藤祐之氏を訪問した。後藤氏は、ひらた旭川荘地域活動支援センターで、高次脳機能障害支援室長として仕事をしている現場職員である。筆者らは十次と川崎祐宣との間に時代背景はズれるものの、地域福祉の何らかの接点があるのではないかと考えた。というのは、川崎は十次よりも時代背景が昭和にズれているとは言うものの、医学の道を目指して同じ岡山県へ来たというめぐり合わせは何を意味するのだろうかという「勘」が的中した。

十次と川崎祐宣との直接的接点はないものの、間接的な接点があることが分かった。どういふことかというところ、戦後、川崎とともに旭川荘の設立に参加した江草安彦は、岡山大学医学部の小児科の助手から転じて一九五六年、二九歳のと

きに旭川荘創設に参加した。(三月一七日付『山陽新聞』)このとき、初代理事長だった川崎祐宣に、江草氏を紹介したのが、先述した岡山博愛会(病院)理事長で、後に旭川荘設立趣意書を起草した更井良夫という人物で、彼は石井十次の信奉者であった。この更井が、この時代に、岡山で日本初のセツルメントを展開した、アリス・ペティ・アダムスの後継者だった。十次やアダムスの命を賭した戦いが、今日の旭川荘を生み出したのだった。もう一度整理すると、十次が孤児救済に奮闘していた頃、十次とアダムスを介して活躍していた更井が、旭川荘設立に一肌脱いで、優秀な医者である江草を紹介し、川崎の医療と福祉を融合した社会福祉事業が立ち上がり、大きく進展したという筋書きになる。十次と「点線で繋がっていた」というのは、後藤氏の言葉である。

このやり取りあのと、後藤氏が指摘するのが、川崎が鹿児島県始良郡横川村(現在の霧島市)生まれで、同地域での教育と、二人が旧制岡山医科大学(現岡山大学医学部)卒業であることに、川崎と石井十次との間接的接点を見出せるのではないかということであったがこれは推測の域を出ない。「点線でつながっていたのでは」と、後藤氏はうまい表現を使ったが、筆者らも同感である。(下に続く)

キーワード…共生、仏教福祉、社会事業、美作仏教各宗自修会、菩提寺、法然上人

(せがわ ひさし 東海学園大学 経営学部教授) (みやけ あきゆき 東海学園大学 経営学部名誉教授)